

## 子育て支援のジェンダー論的検討

○田園調布学園大学 太田由加里  
藤女子大学 木脇奈智子  
国立女性教育会館 島 直子

### 1 目的

この報告の目的は、人口減少時代を迎えた日本の子育ておよび子育て支援の現状と課題を明らかにすることである。1990年代以降、日本における子育て支援は、おもに少子化対策に焦点があてられてきた。しかし、ジェンダーの視点からみた子育て及び子育て支援の在り方については十分に議論されてきたとはいえない。

ジェンダー平等の視点をもって男女が共に働き、ともに家事・育児をするための制度や家族規範、ジェンダー意識を変革することのない少子化対策が有効ではないことは、この20年間の人口動態からも明らかである。ジェンダー平等の視点をもった子育ておよび子育て支援の必要性や、具体的な事例を提示することで、日本の子育てとジェンダーに関する問題提起を行い今後の課題について検討する。

### 2 方法

そこで、この報告ではデータとして、①NPOによる震災母子避難者に対する子育て支援、②フィンランドの母子保健制度による家族支援、③子育てネットワークと男性に関するインタビュー調査、の3つをデータとして、日本の子ども・子育ての現状とジェンダー論的な課題を明らかにするために用いる。

①は東日本大震災の際に他県へ避難した母子に対する地元の子育てNPOの支援活動の事例であり、②はフィンランドの制度に関する文献調査及びフィールドワークである。③自治体議員を対象としたネットワークに関するインタビュー調査である。

これらの調査結果を用いて日本における子育ておよび子育て支援のジェンダー論的分析を行う。

### 3 結果

3つの調査から得た知見をもとに、日本の子育ておよび子育て支援における強固な「母子枠組」（子育ては母親の役割であると社会規範や法制度、人々の意識における大前提）および子育てネットワークから男性が疎外されている現状が明らかになった。

ジェンダーバイアスのかかった制度の見直し、及び、自治体、事業所、家庭、教育など関係部門が連携して、子育てにおける母子枠組みを解放し男性を子育てから疎外しない枠組みに見直す必要が明らかになった。

### 4 結論

少子化問題の根幹は、「子どもの数」ではなく、ジェンダーの視点において、男女ともに生きづらい社会構造にあるのではないだろうか。

### 5 文献

木脇奈智子・太田由加里「子育て支援の現状と課題：第3報ーフィンランドの子育て支援「ネオヴォラ」に着目してー」『藤女子大学QOL研究所紀要』9-1,2014